



TITLE:

ロボットのためのコメディ－ - 笑いを哲学する試論

AUTHOR(S):

佐金, 武

CITATION:

佐金, 武. ロボットのためのコメディ－ - 笑いを哲学する試論. 京都大学文学部哲学研究室紀要 2009, 11

ISSUE DATE:

2009-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/71121>

RIGHT:

ロボットのためのコメディー

——笑いを哲学する試論——

佐金 武

はじめに：人間的、あまりにも人間的な笑い

笑いは極めて人間的である。あまりにも人間的であるので、多くの哲学者は、笑いをもって「人間」を定義しようとしたほどである。人間とは笑う動物である、と。ベルクソンはまた、これを逆転して、人間とはヒトを笑わせることのできる動物であるとも示唆した。これはやや洗練された人間の定義だ。というのも、我々は動物を笑う。近頃では、菌やウイルスですら巷でウケているようだ（石川雅の『もやしもん』参照）。また、ゼンマイ仕掛けの玩具を見るときのように、我々はときとして無生物の動きにも思わずふきだしてしまうことがある。しかし、これらのことはどれも、ベルグソンの提案に対する反証例ではない。彼の意図は、動物なり無生物なり、それらを我々が笑うとき、そこには何か人間的なものが読み込まれているということの指摘にある。動物や無生物はそれら自体が笑いの対象なのではなくて、それらに何らかの人間的な所作が見出され、このことを我々は滑稽と感じるのである。だから、人間とは笑う主体であるというだけでなく、笑いの対象でもあるということができる。

本論で提起したい問題は、笑いにとって本質的といわれる、人間的なものと人間的でないものとの差異は、一体どこにあるのかということだ。そのために私は、笑うロボットの可能性について考える。出発点としてまず私は、笑いの背後には人間的なものが潜在していると考える点においてベルクソンに同意したい。しかし私はまた、「人間的なもの」をヒトに固有の概念と見なす必要はなく、ヒト以外の生物や無生物にもそれら自体の内在的特性として認めうるものだとも考えている。以上のことを論じるため最初に笑いの三大理論と呼ばれるものを紹介し、それらとの対比において笑いについてのベルクソンの考察がもつ射程を肯定的に評価する（第1節）。次いで、笑いの対象としてのロボットと笑う主体としてのロボットという二つの側面から、ロボットと人間の間の差異について検討し（第2節）、笑うロボットの可能性にとって障害となりそうないくつかの問題に対し予め一定の応答を試みる（第3節）。最後に、倫理的主体としての人間という観点から、笑うロボットの人間的なイメージを素描したい（第4節）。

1. 笑いの哲学

そもそも笑いとは何だろうか。笑いは特有の身体所作を伴って現れるが、そのようなサインのすべてをここで笑いの概念に含めたくはない。くすぐったいときの私の振る舞いは、漫才を見ているときの私のそれと同じだとしても、全く異なる意味をもっている。もう少しよく反省してみれば、我々が問題にすべき笑いは、何らかの仕方^{アミューズメント}で愉快さと関連しているように思われる。というのも、笑うとき我々が愉快的気分であることは確かなことから。とはいえ、愉快さはどのようなものであれ笑いを帰結するわけではない。ザ・ローリング・ストーンズの楽曲を聴くことは愉快かもしれないが、爆笑をさうことがコンサート^{スマイル}の価値を高めたりはしない。だから、愉快的気持ちであるときに特徴的な身体表出である笑みとそれ以外の笑いの間にはある種のグラデーションがあることは確かだが、とりあえずはこれらを区別しておく必要がある。以下、第一近似として我々は、ユーモアと関わりのある限りでの笑いを扱うことにしよう。

1.1 笑いの三大理論：不調和説、優越説、そして安堵説

古代から哲学者の興味をひいた笑いも、ユーモアと密接に関係している。彼らはこう問う。ユーモアはどこからやってくるのか。ある事柄がユーモラスであるのは何によってか。レビンソン(Levinson, 1998)の解説によると、三つの古典的理論がある。まず、「不調和説 (incongruity theory)」によれば、ユーモラスなものは、これを享受する側の期待を裏切るばかりかかしいような何かである。不調和説の伝統的支持者には、ショーペンハウアーやカントが含まれる。また、「優越説 (superiority theory)」によれば、ユーモアは、ある対象に対して自分が何らかの点において優越を感じるということに起因する。この説の有力な提唱者は、トマス・ホブズだ。最後に、「安堵説 (relief theory)」においては、ユーモアの本質は、心理的抑圧によって蓄積された心的エネルギーの開放に存すると考えられている。フロイトは、精神病理学の観点からユーモアを分析した、安堵説の提唱者の一人だ。ただし、モンロ(Monro, 1967)によれば、フロイトは、ユーモアはどんなものでもすべて、禁止されていること(タブー)の開放に原因があるとまでは考えていなかった。

これら三つの理論のうちのどれか一つが、ユーモアと笑いについての決定的な説明になっているというわけではないと思われる。というのも、どの理論にも反証例は存在するからだ。たとえば、誰かがバナナの皮で足を滑らせたことによってもたらされる笑いは、不調和説によっては説明されないだろうし、この事例にもっとも適合する説明は優越説であるように思われる。逆に、ナンセンスな言葉遊びに我々が興じることは優越説では説明できず、むしろ不調和説による説明の方がしっくりくるだろう。安堵説は、フロイトも認め

るとおり、ユーモアについての完全に満足のいく説明ではないかもしれない。彼の説明は、ユーモアそのものの分析というよりもむしろ、笑いが生じるときに我々が感じる快樂と深く関わっているように思われる。また、ある種の笑いがフロイト流の心理学的アプローチに適合することはあるにしても、笑いはすべて夢と同列の純粋な精神現象として分析されるというのはやはりいい過ぎだろう。さて、以上のような理由から私は、笑いの三大理論のそれぞれは、ユーモアと笑いのいくつかの特徴を抽出してはいるものの、それはどれもユーモア一般の必要条件にも十分条件にもなっていないと指摘するコーエン(Cohen, 2001)の診断に同意する。

笑いの三大理論はこれだけを見れば、せいぜいのところ「笑いの分類学」に過ぎないようにも思われる。この笑いはこの理論によって説明され、あの笑いはあの理論で説明されるという具合に。もっとも、これらの理論が互いに背反的だとまではいえないし、一つの理論が他の二つを包摂するような仕方ですべてを拡大解釈することは可能かもしれない。しかし、これら三大理論のうちどれか特定のものを擁護したり、笑いについての最善の説明を求めたりすることは本論の目的ではない。それゆえここでは、目下次善の策として、笑いはこれらの理論の選言によって捉えられるものと考え、笑いの多様性に注意を向けられればそれでよしとしよう。

1.2 ベルクソン1：人間的な生と機械的な仕組み

前節に概観した笑いの三大理論はいずれも、個々の哲学者が各々の学的基盤に依拠して、いわばその応用事例として提出した説明に過ぎない。そもそも笑いについての必要かつ十分な定義や統一理論なるものが可能かどうか、私には全く定かではない。ベルクソンの『笑い』は周知のとおり、この同じ現象を哲学的主題とする画期的著作であるが、彼の考察もまた、自らの哲学的立場から全く自由に展開されているわけではない。『笑い』はむしろ、ベルクソン哲学の宣伝広告のような色彩が濃い。加えて、先の三大理論との比較において、ベルクソンに何かオリジナルな理論があったかといえ、それは必ずしも明らかではない。私の見る限り、ベルクソンの立場は三大理論と衝突するようなものではなく、古典喜劇を対象とする個々の考察においては、これらの理論のいいところを論じているかのようには読むこともできる。笑いについての彼の考察の真の独創性は、何か特定の理論的体系化にあるのではなくて、以下に見るそのアプローチの仕方にこそあると私は考えている。

ベルクソンの考察には、本論の関心にとって重要な示唆が多く含まれている。それはまず、人間的な生と機械的な仕組みの対置をモチーフとする。この対置は彼のテキストを通じて、しなやかさとこわばり、弾力と緊張、あるいは人間的事物の生ける継続と自動現象

としての放心等々、言葉を換えていたところに散見される。すぐに予想されるように、「人間的な生」の方は、^{エラン・ヴィタール}生の躍動を標榜するベルクソンの哲学の根本原理と連結している。彼の意図するこの抽象概念の本格的な解明は本論の扱う範囲を超えるが、後に我々は、人間とロボットの概念的区別をめぐって、人間的な生とは何かという問題に立ち戻ることになるだろう。「機械的な仕組み」については、『笑い』のなかで多くの具体例が語られている。歯車やバネ、操り糸のような文字どおりの機械から、肉体、表情、身振り、職業、そして流行に及ぶ、世俗的な固定観念のほとんどがこの機械的な仕組みに分類される。

ベルクソンによれば、人間的な生と機械的な仕組みの対置は、笑いの基本図式である。彼は、ユーモアにはこの二つの要素が不可欠だとし、どちらか一方が不在であるときには、笑いは成立しないと考えている。格言のようにしてテキストに現れる、彼自身の考察をいくつか引いてみよう。

まともな恰好をした人間が真似することのできる不恰好はすべて滑稽になることができる。
(邦訳、32 頁)

人間のからだの態度、身振り、そして運動は、単なる機械をおもわせる程度に正比例して笑いを誘うものである。(同、35 頁)

精神的なものが本義となっているのに、人物の肉体的なものに我々の注意を呼ぶ一切の出来事は滑稽である。(同、54 頁)

人が物の印象を我々に与えるすべての場合に、我々は笑いを催す。(同、59 頁)

要するに、生きる人間のなかに何らかの機械的なぎこちなさが見出されるとき笑いが生じるというのがベルクソンの基本テーゼなのである。

ベルクソンの説明は、人間的な生と機械的な仕組みの対置という彼特有の哲学に基づく非常に抽象的なものではあるけれども、これを具体例にそくして考えてみるなら、現代にもある程度適用可能な視点を我々に提供しているといえるのではないだろうか。チャップリンの『モダン・タイムス』は、人間的な自由と機械的な冷たさの対比の典型例だろう。漫才における「ボケとツッコミ」の基本形態もベルクソンの説明にのせることができそうだ。ボケの神髄はドン・キホーテ的な放心状態をお手本とし、当を得たツッコミを背景として、ある種のステレオタイプの不条理を露わにすることにあるといえる。ものまね、パ

ロディー、風刺、漫画における物象化の手法は、社会に沈殿する種々の固定観念を特徴的な仕方でも描き出し、そこに我々の注意を向けさせることで笑いを誘う。いずれの場合も、ベルクソンの考察にとってもっとも重要なことは、人間的な生の基盤がないところでは、機械的な仕組みの失敗の滑稽さは見えてこないし、人間的な生が滞りなく発展を遂げ、機械的な仕組みが暴露されないようなときにもまた、笑いの生じる余地はないということだ。

1.3 ベルクソン2：笑いの社会的効用

ベルクソンが示唆するところでは、笑いには二種類のものがある。一つは、本論冒頭において触れたように、ヒトならざるものに人間的なものが見出されるときあの笑いである。それは本質的には、人間賛美であり、ゆえに優れて社会的である。他方、反制度的（あるいは反体制的）であるという全く別の理由で、これまた優れて社会的であるような別の笑いも存在する。社会は人間的な生のしなやかさを維持しようとし、ある種の制度的硬直を忌み嫌う。この「制度的硬直」とは正に、ベルクソンのいう機械的な仕組みのことであり、先に概観した彼の考えにしたがえば、滑稽の対象とされるべきものである。さて、ベルクソンは次のようにいう。

要するに [笑いは]、社会的からだの表面に機械的のこわばりとしてとどまっていそうなものをことごとくしなやかにするのだ。笑いは、だから、純粹美学に属するものではない。なぜなら、笑いは...全体的完成という実目的を追求しているから。...人が人に対して単に見世物として身を与えている中心地帯の中に、肉体、精神、及び性格の或る種のこわばりが残留するが、このものを社会はその成員たちにできるだけ大きい弾力と高い社交性へと獲得させるためになお除去したがるのである。このこわばりが滑稽なるものであり、そして笑いはその懲罰なのである。(邦訳、27-8 頁)

ベルクソンの考察の力点は明らかに、笑いのこの社会的効用にある。それはいわば、生きた人間社会を絶えず回復するための、制度的硬直に対する自然な防衛反応なのである。

笑いには社会的効用があるなどということは、ベルクソンの指摘を待つまでもなく、我々は実践的に十分気づいているはずだといわれるかもしれない。このようにいわれるとき、多くの人々が念頭においているのは、「笑いは社会の潤滑油である」というようなことだろう。もちろん、ベルクソンの思想はそのような常識的見解よりもずっと深い。彼もまた、笑いほど人の心を武装解除させる手段はないということは認めている。しかし、笑いの本当の社会的効用は人々の共感を喚起することではなくて、人間的な生のしなやかさに抗う

こわばりを矯正し揉み柔らげることこそ存する。笑いが社会的懲罰であるというのはセンセーションを狙った単なる哲学的ポーズではない。もっとグロテスクに言えば、笑いは制度的硬直に対する半ば暴力的な社会的制裁なのだ。ベルクソンはしばしば、笑いの対象に共感を抱くことは笑いの阻害要因となることに注意を喚起する。あなたが本当に私を笑わせたいならば、同情や憐憫の念を私に抱かせないように気をつける必要がある、と。笑いはこの点において、共感する心とは正反対の位置にある。もっとも、ベルクソンがここでいわんとするのは、私の笑いがあなたに対する個人的悪意に根ざしているということではなくて、それがあなたの見せる機械的なぎこちなさの矯正に役立つということである。

ところで、ベルクソンは、人間的な生の表面にとどまる機械的なぎこちなさが、我々になぜ奇妙で滑稽な印象をもたらすのかということについては十分な説明を与えていないように思われる。我々はなぜ、制度的硬直を笑いによって懲罰しなければならないのか。とはいえ、既存の社会通念からとりあえずは身を引き離し、その制度的硬直をカリカチュアとして笑いの対象とする新たな企みはそれ自体、自由の意識だともいえなくはない。ベルクソンによれば、同じものの繰り返しを嫌う自由の意識は人間的な生の根本原理である。だとすれば、この自由の意識に根拠する笑いはそれ自体、我々にとっての真の快楽であり、高次の段階における人間的な生の体現という側面をもっているということ是可以する。

2. 笑いの対象としてのロボットと笑う主体としてのロボット

ロボットの振る舞いを観察することは愉快だ。それは、ベルクソンが既に示唆していた理由によってである。すなわち、機械的な仕組みのうちに、我々が生命の模倣を見出すからである。仮にロボットの振る舞いが人間のそれに完全に類似することがあるとしても、彼女たちはなおも笑いの対象であり続けるかもしれない。我々が、生命の模倣を模倣と信じ込んでいる限りは。しかし、生命、とりわけ人間的な生とはそもそも何なのだろうか。我々がそれをロボットのようなメカニズムのうちに単なる模倣としてではなく、真にそれと認めることは原理的に不可能なのだろうか。

ロボットはいつまでも笑いの対象に留まり続けるのかという問いと、ロボットは笑う主体でもありうるのかという問いは、ある重要な点において密接にリンクしている。ロボットはいかなる場合もロボットだという主張は、我々はロボットによって笑いの社会的制裁を受けるはずはないという前提に基づいている。この前提をさらに詮索してみるなら、人間が設計するメカニズムのうちに人間的な生が宿るなどということは信じがたく思われているからだろう。我々は他のヒトの人間的な生を認めることにはやぶさかではないのに、自分たちの模造として設計されたアンドロイドにはそれを認めることをなぜか躊躇う。と

ころで、この躊躇いは一体何を理由としているのだろうか。

一つの答えは、人間的な生の自^{スパンデューエティー}発性にあるのかもしれない。我々人間は、他人の行動を事前には予測することができないし、その人を自分の思うとおりに動かすこともできない。男女関係、友情、老人と若者の間の意思疎通、異文化交流は常にそうした不安定な基盤の上に成り立っている。この不安定さを隠蔽し、あたかもそこに確固とした相互理解が成り立っているかのように思いこむことは、悲劇を通り越して喜劇になることがある。ソフィア・ Coppola監督の映画『ロスト・イン・トランスレーション』には、こうした相互理解が実は奇跡的とでもいうべき仕方ではしか成立しないことが見事に描き出されている。我々は、様々な人間関係のなかで、何をいうべきかを見出せないことがある。そのようなときに我々がなし得ることは、不安定さのなかのある種の自動現象を半ばコメディイとして笑いながらも、ただただ相手との共感を期待することだけである。ある状況においてはこのことは、人間についての重要な真実だと私は思う。

ロボットにはこのような自発性がない、そう考える人もいるだろう。ロボットは我々が設計した範囲の思考能力と行動能力のみをもつはずで、設計されたものが設計したものの期待を裏切るはずはない、と。ここで、次の二つの点に注意すべきだ。第一に、我々がもつロボットのイメージが曖昧模糊としており、ロボットを単に我々によって設計されたものと定義するだけでは、ロボットには自発性がないと結論づけるのに十分ではない。アンドロイドを扱う多くの SF 作品においては、無機的な人造人間と有機的な人造人間の区別はあるものの、フィリップ・K・ディック原作の『アンドロイドは電気羊の夢をみるか』に顕著のように、人間と同等の自発性をもつ人造人間が描かれることがある。このような未来像が実現するかどうかはまた別の話ではあるが、少なくとも我々は、人間と同等の自発性を備えたロボットのイメージをもつことはできる。第二に、設計されたものが設計したものの期待を裏切るはずはないというのはむしろ、我々の希望的観測に過ぎないか、あるいは裏切つてはならないと決め込んでいることからの独断であるかのどちらだろうか。試みに、あなた自身が非常によくできたアンドロイドだということが判明したと想定してみよう。そのような場合にも、自分が設計者の意図にそぐわない行動に打って出るだけの自発性を備えているというあなたの意識は損なわれないはずだ。

以上の理由により、私は、自発的な主体としてのロボットが、少なくとも概念的には可能だろうと結論する。次に取り組むべき課題は、ロボットが笑うといえるのはどのような条件においてかということのを少しでも明らかにすることだ。そのため、以下本論においてはまず、ロボットと笑いに関わる種々のややこしい問題を我々が扱う問題から峻別し、先に見たベルクソンの考察をもとに笑うロボットのイメージについて論じることにしよう。

3. 笑いのクオリアと笑いの感情説について

笑うロボットはいかにして可能かという問題を、ロボットは我々が「笑いのクオリア」と呼ぶものをどのようにしてもちうるかという問題と混同しないことが肝要である。ロボットが何であれクオリアなるものをもつかどうかは、ロボットにとっての笑いとはさしあたり無関係な問題である。哲学的ゾンビが可能か否かという問題、すなわち意識をもたない私の完全な物理的複製が可能か否かという問題については諸説様々あるけれども、仮にそのようなものが可能だとしても、私のゾンビは笑わないと考える根拠は何もない。むしろ、私のゾンビは、意識現象を除く私の完璧な複製なのだから、少なくとも彼が笑っているように見えるということは間違いない。そしてまた、「X が笑っているように見える」ということは、その身体所作が問題である限りにおいては、端的に「X が笑っている」ということでもある。私のゾンビの笑いとその以外の他人の笑いをその記述において区別すべきものはない。

しかし、ロボットと笑いを論じる上で無視できない、また別のややこしい問題もある。それは、笑いが感情の現れの一種かどうかという問題だ。我々は、第1節冒頭において既に、愉快的気持ち一般の表出としての笑みとユーモアと関わりのある笑いの区別について触れた。とはいえ、笑いが愉快的気持ちの現れの特殊事例であるかもしれない可能性は全く排除されていない。「愉快的気持ち」というのが、対象志向的ではないという理由で、「恐れ」や「愛」のような感情と同種のものとは見なせないと考えるスクルトン(Scruton, 1987)のような論者もいるが、シャープ(Sharp, 1987)によれば、多くの点において愉快さは感情的なものだとも考えるもっともな理由がある。それゆえ、笑いが愉快的気持ちの表出の特殊事例であるとするならば、笑いにも感情的な要素が多く含まれているはずだ。そして、笑いがそれ固有の感情の表出だということが正しく、ロボットは感情を持ち得ないのだとすれば、ロボットが笑うことは不可能ということになるだろう。

ところで、ジェームス＝ランゲ説として知られる心理学の有名なテーゼによれば、「人は悲しいから泣くのではなく、泣くから悲しいのだ」といわれる。これを笑いにも適用し、「人は愉快だから笑うのではなく、笑うから愉快なのだ」と考えてみたらどうだろうか。確かに、ロボットはそれ自体では感情をもたないかもしれない。しかし、ジェームス＝ランゲ説のこの拡張的解釈にしたがえば、ロボットは笑うことはできる。そればかりではなく、ロボットは、笑うということから愉快の何たるかを会得することさえできるだろう。笑いがある種の感情と切り離すことができないのだとしても、そのような感情が社会的実践のなかで育まれるべきものではないと考える理由はない。愉快さの感情は学ぶことができる。

4. 笑うロボットの作り方

さて、準備は整った。次に我々は、笑うロボットのイメージを明らかにしたい。ロボットが笑うといえるのは、どのような条件においてか。あるいは、どのようなロボットなら、彼女が笑っているということを我々は素直に認めることができるのか。ベルクソンの考察にしたがえば、人間的な生に機械的な仕組みが見出されるとき、我々は笑う。だから、ベルクソンのこの説明図式にのっとってロボットを笑う主体と見なすためにはまず、「人間的な生」と「機械的な仕組み」という彼の専門用語をロボットにも適用できるような仕方で捉え直す必要がある。

我々の社会において、何が我々を人間らしくしているのだろうか。私の考えでは、一つの答えは倫理にある。まず、我々は銘々、ある特定のコミュニティーの内部で何らかの道徳的主体と見なされているということに注目しよう。ただし、社会的文脈は実に多様であって、それに応じて道徳的主体の意味も変化する。あなたはある文脈では母親や父親としての道徳的役割を担うことになるかもしれないし、また別の文脈では特定の職業人としての自分を見出すことになるかもしれない。そうした様々に異なる道徳的主体でありながらも、なおも「私」らしく生きようとする自分を見出すとき、あなたは倫理的主体でもある。あなたが限られた集団においてのみ、その判断や行動の責任を問われるとすれば、その集団のルールのみが道徳的主体としてのあなたを規定することになる。しかし、特定の社会的ルールによってのみ規定される道徳的主体は、倫理的主体と呼ぶには未だ不十分だ。あなたが倫理的主体でもあるというためには、他の様々な社会的文脈を考慮に入れた上で判断し行為できるのでなければならない。つまり、倫理に関わる諸々の問題は、何か特定の道徳に拘泥することなく、複数の社会的文脈の間でこそ問われねばならない。このような倫理の普遍性にこそ、我々が複数のコミュニティーをまたいで「人間」と見なされるための要件を求めることができる。私は、倫理的主体としての「私」や「人間」が何らかの実体として存在すると主張したいわけではないし、ましてやそのようなものを捏造しようと説得を試みているわけでもない。しかし、倫理的主体としての自分を生きているというリアルな感触がなければ、自分が一人の人間であるという実感も生じないだろうと思うのである。

ベルクソンのいう人間的な生の概念もまた、倫理と深く関わっているように私には思われる。だから、笑いにはどこか倫理的なところがある。まず、スーザ(Sousa, 1987)も着目するように、笑いとはときとして道徳に反することがある。ある社会的儀式を表だって笑いの対象とすることは、その儀式を生真面目に受け止めるコミュニティーに対する攻撃を意味する。(そのとき、典型的な反応は次の二つに一つだ。すなわち、笑う側を自分たちの敵と

して真っ向から断罪するか、あるいは全くのエイリアンとして黙殺するかのいずれかである。) いうまでもなく、ここで笑いの対象となっている社会的儀式とは、ベルクソンのいう機械的な仕組みを意図する別のいい方に過ぎない。この機械的な仕組みにこだわる側にとっては、笑いは常に脅威なのだ。とはいえ、特定のコミュニティの道徳に反することが笑いの本質ではない。笑いはむしろ、特定の道徳から自由な状況を思考することから生まれる。より正確に言えば、特定の道徳に縛られない、他の社会的文脈が可能であることの気づきがなければ、笑いが生じる余地はないということだ。アンチ・モラルであることが笑いの本質ではなく、モラル・フリーであることこそが笑いの実質的価値である。このように考えると、笑いは共感する心とは方向性こそ全く異なるけれども、そこには多分に倫理的な要素が含まれていることは間違いない。(ちなみに、ある笑いが特定の道徳に反する理由を明らかにするには経験的観察が不可欠である。しかし、社会的文脈という観点からすれば、笑いと道徳の関係を一般に次のように考えることができる。すなわち、笑いが道徳に反するというのは、ある社会的文脈にもっとも高いプライオリティーがおかれるべき状況下で、偶々そこからの逸脱が含まれているような場合か、目下関連するすべての社会的文脈について、笑いがそれらに対する反逆と見なされる場合のいずれかである。)

さて、以上の考察から、笑うロボットが可能であるとすれば、それがどのようなイメージのものであるかが、半ば消去法的に見えてくる。ロボットは、これまで述べてきたような意味において真に人間らしいといえるとき、はじめて笑うことができる。ところで、我々がロボットに対して抱くイメージは様々である。人工知能ハルの暴走を物語の転機に据える、キューブリック監督の『2001 年宇宙の旅』、人類とロボットの抗争を描いた、ジェームズ・キャメロン監督の『ターミネーター』、ロボット工学三原則で有名な、アイザック・アシモフ原作の『われはロボット』、これらは血の通っていない合理性の産物としてのロボットのイメージだ。他方、人間以上に愛に溢れたロボットのイメージもある。愛情を埋め込まれた少年型ロボットの登場する、スピルバーグ監督の『AI』、同じく手塚治虫の『鉄腕アトム』、ごく最近には、純粋な心をもつロボット小雪が活躍する、業田良家の『新・自虐の詩』等々。しかし、これらはどれも、笑うロボットのイメージとしては何かが足りない印象がある。

血も涙もない恐ろしいロボットのイメージと、人間以上に愛に溢れたロボットのイメージは二つの極端であって、それらはやはり笑うロボットのイメージではない。我々はほどほどに合理的であり、ほどほどに純真無垢なのである。我々は合理性を発明し、それを選択した。我々は互いに愛し合うこともできるが、ときには利害関係において対立することもある。合理的に行動することがよいこともあれば、合理性そのものを疑い、重要な賭け

に打って出なければならない場合もある。ある状況においては友愛の対象となるべき相手が、別の状況においては敵と見なされる。こうしたことが人間社会についての事実である。だから、ロボットが人間的な生を享受するというためには、以上のような文脈の揺らぎを感知しつつ、そのなかで一定の強度をもって存続することができるのでなければならない。

笑うロボットは、ほどほどに合理的であり、ほどほどに純真無垢であるような誰かだろう。もしかすると、藤子・F・不二雄の『ドラえもん』に登場する猫型ロボットは、このイメージに近いのかもしれない。いずれにせよ、合理的であれ人間的であれシリアスに過ぎるロボットは笑ってはならず、少なくともドラえもん程度の不完全さを備えていなければ、笑いの何たるかを理解することはできないだろうと私は思う。そのようなロボットを作ることは、完全なロボットを作ることよりも工学的にずっと難しいはずだし、その労力に見合うだけの実際的な価値はないかもしれない。しかし、仮にそのようなロボットが可能だとすれば、我々は彼や彼女を我々と同じような笑う主体として認めるべきだと私はいたい。もちろん、単に笑う能力を追加するだけでは、笑うロボットにはならない。ロボットは笑う能力を持つから笑うのではなく、我々が笑っていると見なすから笑うことができるのである。そして、我々がなぜある主体を笑っていると見なすかといえばそれは、その主体が様々な社会的文脈を生き、他の可能な社会のあり方に配慮することができるからだ。もっとも、そのような笑うロボットが可能な場合には、我々は、「ロボット」という語を別の仕方を用い、もはや人間との対比においてそれを理解することはないだろう。

おわりに：不完全なロボットの住むこのしなやかな社会

本論において私は、ベルクソンの笑いの哲学に依拠しつつ、その拡張的解釈を試みることによって、ロボットは笑うことができるかという問題に対し肯定的に答えようとした。ベルクソンは、人間的な生と機械的な仕組みの対置は笑いの基本図式であり、どちらか一方が不在であるときには、笑いは成立しないと考えた。我々の結論もまたベルクソンの考えからそれほど遠くはないところにある。我々はただ、「人間的な生」と「機械的な仕組み」ということの再解釈を展開したのであり、この新たな解釈において、ロボットが人間的な生を決して享受することはできないとする概念的困難はないと論じたのである。

ところで、本論で論じたこの同じ問題は、我々人間がどの程度ロボットであり、我々の社会から笑いが消えるのはどのようなときかという、全く逆の問題を立てることで考えることもできただろう。古屋兎丸原作の『Marieの奏でる音楽』という漫画には、この問題に対する非常に示唆的な内容が含まれている。その空想上の人間社会においては、人々は穏やかで争わず、完璧な友愛によって平和が実現されている。ただ、その社会では人々に

は決してできないいくつかのことがある。たとえば、空を飛ぶ鳥機械の発明である。一方、物語の主人公のカイには、神を性愛の対象とするある特殊な能力があつて、このことを契機として、完璧な社会の調和は少しだけ歪みを見せる。人々は争い始め、その代償としてわずかの間、神だけに許された空を駆けめぐるという奇跡が開ける。そのとき、カイは、50年に一度訪れるという、二つの可能な人間社会の間での孤独な選択を強いられる。

どうやら、我々の現実世界では全く別の選択が行われたようだ。人々は今日もどこかで戦い、社会の調和を目指しながらも不安定さはそこかしこに顔を出し、その代償としてわずかの間、我々は危険な笑いの快楽を享受することができる。幸か不幸か、現実の我々は一つの固定的な物語の文脈で生きることができない。笑いはそこで生じる。もしも我々人間が完全なロボットだとしたら、物語は決して揺らぐことなく、我々は笑っていなかっただろうと私は思う。不完全なロボットの住むこのしなやかな社会ということに思いがいたるとき、人間とロボットの通常考えられている区別は自由に逆転してかまわない。

文献

- Cohen, T. (2001) "Humor," in *The Routledge Companion to Aesthetics*, B. Gaut and D. M. Lopes (eds.), London: Routledge, pp. 375-81.
- Levinson, J. (1998) "Humour," in *Routledge Encyclopedia of Philosophy Vol. 4*, E. Craig (ed.), London: Routledge, pp. 562-67.
- Monro, D. H. (1967) "Humor," in *The Encyclopedia of Philosophy Vol. 3*, P. Edward (ed.), New York: Macmillan, pp. 90-3.
- Scruton, R. (1987) "Laughter," in *The Philosophy of Laughter and Humor*, J. Morreall (ed.), Albany: State University of New York Press, pp. 156-71.
- Sharp, R. (1987) "Seven Reasons Why Amusement Is an Emotion," in *The Philosophy of Laughter and Humor*, J. Morreall (ed.), Albany: State University of New York Press, pp. 208-11.
- Sousa, R. D. (1987) "When Is It Wrong to Laugh?," in *The Philosophy of Laughter and Humor*, J. Morreall (ed.), Albany: State University of New York Press, pp. 226-49.
- ベルクソン, H. (1991) 『笑い』, 林達夫訳, 岩波文庫.